

◆八木健 選

～ 鈴鹿洋子・正岡愛子の『母子草』を読む ～

滑稽俳句協会会員の鈴鹿洋子さんが、昨年、母と娘の合同句集『母子草』を出版された。母の愛子さんは、途中二十年間中断しながらも五十年余り俳句に親しんでおられ、現在九十八歳でお元気である。

洋子さんにとって、お母様は俳句の一番のお手本である。句集からは、俳句を愛する母の俳句精神を受け継いでいるという喜びが伝わって来る。俳句でつながれる母娘。なんと幸せなことだろう。

句集の前半は愛子さんの作品。春夏秋冬新年と五章になっており、後半が洋子さんの作品で、梅日和、白日傘など春夏秋冬の季語が章のタイトルとなっている。

愛子さんの句で私が一番に印象に残ったのは、ご主人を失くされた前後の率直な心情を詠まれた句である。百の言葉を羅列しても語り尽くせない思いが五七五に語られ、夫恋いの句に亡夫への思いが溢れている。

骨拾ひ了へて真夏の帰途につく
喪服着て足の重さや油照り
無に帰る骨の白さや夏の月
夫の忌の風の重さや梅雨の雷
暑かろと仏をあおぐ渋団扇
独り居の今年の暑さ持て余す
更衣子にまじまじと亡夫見ゆ

愛子さんの句に観られるのは、日常を切り取る繊細な感性と、正確な写生力、独自の表現の巧みである。子どもを詠んだ句も多く、家族への思いが温かく読者に伝わってくる。

針を持つ指まで睡し春炬燵
蓬餅餡の染みたる添手紙
少女跳ぶ縄が叩くや梅雨晴れ間
振りちぎる体の雫梅雨の犬
夏服のフリル豊かに子の跳ねる
残暑の鯉小言言ひたき口をする
蛭狩り子を追ふ母の声荒ぶ
金魚掬い周りの子等も皆しゃがむ
俎を大と取り替え初鯉
不揃いの園児の体操今朝の秋
薬湯を吞んで残暑の息をする
時雨られて止むを待つ間の小買物
晴着の子色の溢れる初鏡

娘、洋子さんの作品も、母譲りのこまやかで丁寧な視点があり、的確な言葉
選びが読者を惹きつける。

夏至の日や上り詰めたる観覧車
ブランコや突き返される空の壁
ブランコが揺り戻ってくることを「空に壁があるから突き返される」のだと
いう断定が可笑しい。

バイパスに分断された田を植える
表情筋豊かな手話や風薫る
青葉風話筒抜け格子窓

愛子さんが洋子さんを句に詠まれたように、洋子さんもまた子どもを詠む。
そして、母、夫、祖父も登場する。

菖蒲湯や兄弟げんかの傷染みる

一週間島の子になる夏休み

歯科眼科耳鼻科に通う夏休み

宿題は家族総出や八月尽

梅酒や瓶に貼られた母の文字

お互いの白髪が目立つ日向ぼこ

晩年の祖父の野良着や案山子着る

さらに、洋子さんの句は、身近の小さな動植物や日々の何気ない出来事を、
シンプル且つ面白く詠んで楽しい。

この部屋に三日居坐る冬の蠅

遠慮なく綿虫入る座禅堂

秋雨の貼り付いているふくらはぎ

防災日賞味期限を食べ尽す

太陽にこじ開けられし柘榴かな

釣糸の海面くすぐる鯊日和

猪のやりたい放題島を喰う

讃岐派も伊予派も居りて饅頭すき

俳句は「言葉のスナップ写真」だから、気楽に日々の事を句に詠んで欲しい
と常々言っているが、この『母子草』は、まさに家族のアルバムである。子ども
の頃に身近に俳句を楽しむ家族が居てくださったことは、なんとも羨ましい
ことである。親子の句集を編めることも何と幸せなことだろうか。